慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	徳田教之氏学位請求論文審査要旨
Sub Title	
Author	
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1975
Jtitle	法學研究 : 法律・ 政治・ 社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.48, No.5 (1975. 5) ,p.114- 119
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特別記事
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19750515-0114

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

徳田教之氏学位請求論文審査要旨

徳田教之氏提出にかかる学位請求論文「中国共産党における毛沢東主義の形成と展開――特に一九三五年―一九五六年の時期を中心として――」の構成はつぎのとおりである。

序文

第一部　毛沢東主義の形成　一九三五年―一九四五年

第一章　分析の枠組

第二章　ひとりの指導者の出現まで

第一節　遵義会議の限定的勝利

第二節　四川省北西部―指導権の不確定性

第三節　瓦窰堡―指導権の定着化へ

第三章　毛沢東のリーダーシップの漸次的成長

第一節　権威の原始的蓄積

第二節　集団の結合

第四章　超越的権威への前進の加速化

第一節　六中全会―前進の始まり

第二節　党内での反応

第三節　圧力の加速化

第四節　毛沢東と王明

第五章　カリスマ的指導への「大突進」としての整風運動

第一節　危機の発生と全面的な動員

第二節　整風運動の政治的文脈

第三節　指導の多元的構造の終結

第四節　毛沢東崇拝の噴出―一九四三年

第六章　党史の改訂―神話の創造

第一節　党史の検討

第二節　毛沢東の思想から「毛沢東思想」への転換

第三節　シンボル創出の対外的条件

第七章　毛沢東の思想の凝集力―むすびに代えて

第二部　毛沢東主義の展開　一九四九年―一九五六年

第八章　高崗・饒漱石粛清の政治力学

はじめに

第一節　事件処理の経過

第二節　葛藤の構造

第三節　粛清の政治的衝撃

第九章　社会主義戦略としての毛沢東主義の起源

はじめに

第一節　転換期の政治状況

第二節　ソ連モデルの学習と毛沢東の「沈黙」の終り

第三節　「農業合作社」演説の論理と心理

第四節　「反革命」への認識

第五節　動員状況への反応
第六節　新しい政治哲学の出現
むすびに代えて

中国現代史の研究において、毛沢東研究のもつ重要性が極めて大きいことはいうまでもない。それだけに、毛沢東の思想とそのリーダーシップに関する研究については、国際的にも国内的にもすぐれた研究業績が発表されてきている。しかし、時期的にいえば、延安時期における毛沢東研究を含めた中国共産党史そのものの研究は決して十分なものとはいえないし、一九四九年の中華人民共和国成立以後における毛沢東研究の成果も内容的には不満足であるといってよいであろう。徳田教之氏によるこの論文は、中国共産党の長征から延安時期における毛沢東のリーダーシップの成立過程とその性格、ならびに中華人民共和国成立以後における毛沢東のリーダーシップの内包する政治力学的諸問題および社会主義建設戦略としての「毛沢東主義」とその背景にある政治哲学を究明しようとしたものであって、多くの点でこれまでの毛沢東研究の未開拓な分野に研究の手をのばしているばかりでなく、詳細な実証的分析によって徳田氏自身の新しい解釈を提供している。その意味で、この研究は、毛沢東研究ひいては中国現代史研究の発展に寄与する本格的研究の一つとして評価されてよいであろう。

この論文は、二つの部分から構成されている。第一部「毛沢東主義の形成」は、毛沢東のリーダーシップの成長を共産党内における「権威の形成」の過程としてとらえ、政治学的な枠組を利用しつつ、一九三五年一月の遵義会議から一九四五年の党七全大会においてかれが一種のカリスマ的指導者として登場するまでの時期における毛沢東のリーダーシップの形成過程を、その政治的環境、革命戦略、党組織操縦技術などの諸側面から詳細に分析したものであり、第一章から第七章までがこれにあてられている。また第二部「毛沢東主義の展開」は、一九五四年の中国共産党最高指導部における権力闘争としての高崗、饒漱石粛清事件と、一九五五年の農業集団化における毛沢東のリーダーシップの在り方を分析し、社会主義建設の戦略をめぐる党指導部内の緊張関係のパターンと、大躍進運動・文化大革命につながる「毛沢東主義」の本質を明らかにしようとしたものであり、第八章および第九章がこれにあてられている。

徳田氏は、まず第一章において、「権威の形成」のパターンを三段階に分け、それが㈠一定の支配関係の成立、㈡権力を権威に転換するための権威の原始的蓄積、信条体系の拡大強化、㈢権威の人格化、カリスマ的指導への転換、という三つの段階を経て進行することを明らかにし、この枠組を基礎として、毛沢東の「権威の形成」過程を追求している。この第一段階に照応するものが第二章であるが、ここではまず、毛沢東の「権威の形成」への第一歩としての遵義会議の位置づけが行われている。徳田氏によれば、一九三五年一月長征の途次に開かれたいわゆる遵義会議は、これまで多くの論者によって主張されてきたように毛沢東の党内支配権が確立された会議ではなく、党内の権力関係からみても、またイデオロギー的側面からみても、いわば毛沢東のロシア留学生派に対する限定的不確定的勝利

にすぎなかつた。このことは、会議の主要な論争点が軍事作戦上の問題に限定されていたこと、党と軍の新しい指導部がロシア留学生派との一種の集団指導的形態をとつていたこと、長征途上張国燾の挑戦をうけ危機に直面したことなどからも明らかである。毛の指導権がこの限定的勝利からさらに新しい成長の段階を迎えたのは、長征終了直後の一九三五年十二月瓦窰堡で開かれた中央政治局会議においてであり、ここで毛沢東の党内での主導的役割が確認されると同時に、瓦窰堡決議の内容から判断して、毛沢東の延安時期における革命戦略の原型がこのときにつくり出され、中国共産党のなかに「ひとりの指導者が出現した」としている。ここに示された徳田氏の遵義会議、とくに瓦窰堡会議の党史上の位置づけは、この二つの会議に対するこれまでの解釈に新しい視角を提供したものということができるであろう。

「権威の形成」の第二段階に照応するものが第三章と第四章である。徳田氏は第三章において、抗日戦争の勃発にともなう困難な政治的軍事的組織的環境のなかで毛沢東が行つた抗日民族統一戦線政策決定における指導性の発揮、中国革命戦争と抗日戦争の戦略問題の理論的体系化、哲学の分野での理論活動、ロシア留学生派との微妙な協調と相互依存関係にみられる柔軟な幹部政策の適用、などの問題について、極めて詳細に検討し、かれが主体的には権威の原始的蓄積をこの時期に終了したことを論証すると同時に、それにもかかわらず毛自身を含めて全党的には、毛沢東の思想と指導の独自性に対する認識がまだ十分ではなく、「結局この時期における毛沢東の指導者としてのイメージと存在の態様は、かれが集団指導というリーダーシップの構造のなかで、一人の卓越した実践的戦略家として、指導者群の頂点に立つていたにすぎなかつた」としている。

しかし、このような状況は、一九三八年十一月の六中全会を契機として、毛沢東の権威確立の方向にむかつて流動化する。徳田氏によれば、六中全会での毛沢東の政治報告「新段階論」は指導者としての毛沢東の「自己主張の漸増と『上から』の圧力の行使の始まり」であり、「毛沢東自身による中国共産党の毛沢東化への前進運動の出発点」と位置づけられるものであつた。とくにかれがここでとりあげた「マルクス主義の中国化」という提唱は、「イデオロギー上の権威の源泉を、モスクワから離れて、中国それ自身のなかにより強く求めていつたものであり」、「中国のマルクス主義の創造者としての毛沢東その人のなかに、自立的にみずからのイデオロギー的権威の源泉を求め」ていつたものということができるのである。かれは、その後、「『共産党人』発刊のことば」、「中国革命と中国共産党」、「新民主主義論」など一連の重要論文をひきつづき発表してイデオロギー上の主導権を掌握し、一九四〇年には党内に揺ぎなき革命戦略家としての地位をきづきあげることとなつたのである。

しかし、このような毛独自の思想と党建設の展開は、当然に党内指導者集団の協調関係を流動化させざるをえない。いいかえればそれは、党内の理論活動の主流であつた王明を頂点とするロシア留学生派に対するイデオロギー上およびリーダーシップ上での批判闘争の始まりを示すものであり、当時延安でひらかれた「幹部学習運動」

はこのような方向への毛沢東の重要な試みであつた。この結果、党内には、全く新しい徴候として毛沢東への称賛がロシア留学生派の内部からも出現しはじめたのである。

第三章および第四章で展開された毛沢東の「権威形成」の第二段階の分析は、徳田氏の緻密な論理と豊富な資料に裏づけられ、まことに説得力に富んでいる。それは、この時期における毛沢東のリーダーシップの性格の微妙な変化を的確にとらえ、これまでの毛沢東研究の未開拓な分野をきりひらいたものとして、高く評価されてよいと思われる。さらに、同氏が第四章において、毛沢東と王明との対立の基本的原因が、一般に広く理解されているような抗日民族統一戦線政策での「相違点」にあるのではなく、「より一般的なイデオロギー—それは毛の中国共産党における権威に係つた—の領域にあつた」こと、いいかえれば、党の毛沢東化という毛の課題にとつて、イデオロギー上での王明の抜きがたい影響力はなんとしても排除されなければならない主要な問題であつた、ということを指摘している点も、われわれに重要な新解釈を提供したものといつてよいであろう。

「権威の形成」の第三段階は、一九四一年から一九四五年に至る時期であるが、それには第五章および第六章があてられている。ここではまず、毛沢東の指導のカリスマへの転換について、それを可能にした種々の基本的条件が明らかにされている。徳田氏によれば、日本軍の猛烈な抗日根拠地進攻に伴つて発生した厳しい危機的状況、それに対応するために必要な体制再編制への圧力、リーダーシップの性質転換への要求、毛沢東自身の意志、その協力者たちの助力などがそれであり、これらの多様な社会的諸力が統合されて、そこに一人の「運命的な指導者」がつくりだされ、その指導者の「思想」が、抗日根拠地の動員体制を支える強固なイデオロギー的凝集力の源泉となつたのである。一九四二年延安において展開された整風運動は、このような脈絡のなかで、「中国共産党の毛沢東化へ向かう毛沢東自身による慎重に計画された『大突進』」であり、これを契機としてロシア留学生派の影響力が全面的に否定され、毛沢東の指導の正当性に対する讃辞が党内に数多く出現することとなるのである。

かくて、一九四三年「危機」が克服されるに至つて、毛沢東の指導の「実績」は、党内における毛沢東崇拝を噴出させ、「毛沢東思想」という用語が現れ、毛の指導はカリスマ的性格をおびることとなる。このカリスマ性は、最後的には、中国共産党の党史の改訂をつうじ毛沢東の無謬性の神話を創造することによつて完成され、「毛沢東思想」は党のイデオロギーとしての役割を担うこととなり、その結果、党のイデオロギーとしての「毛沢東思想」と「毛沢東の思想」との間には乖離が生じることとなつたのである。

ついで徳田氏は、このような「毛沢東思想」の体現者としての毛沢東そのものの思想の凝集力について、第七章で詳細な検討を加え、中国共産党は毛沢東のカリスマ的指導が認められたといわれる七全大会当時においてすら、「毛沢東思想」を中軸として基本的には連帯性を保ちながらも、その枠内で微妙な多様性を含んでいたこ

とを明らかにするとともに、その権威形成過程の特質から毛沢東のリーダーシップのもつ強さと弱さとを明確に指摘している。

この部分の研究で認められる徳田氏の功績は、毛沢東のリーダーシップのカリスマ化への契機として、前述したいくつかの基本的条件を理論的に設定し、それを現実の政治的展開のなかで綿密に論証していつたことであろう。とくに、それとの関連でとらえられた整風運動と党史改訂のもつ歴史的意味づけは、党史研究にとつて重要な参考となるであろう、さらにまた、同氏が第七章の終りの部分で、毛のカリスマ的指導は大衆動員的状況のなかでつくりだされたものであり、それだけにひとたびその緊張状態が去つて安定状況のなかで緩和と制度化が進行した場合、毛沢東の人格化されたカリスマ的指導は否定的影響を蒙らざるをえないとして、毛沢東のカリスマ的指導と、緩和と制度化の対抗的関係を指摘している点は、中華人民共和国史における毛沢東指導の位置づけとの関連において、示唆にとむ見解であるといつてよいであろう。

第二部「毛沢東主義の展開」には第八章「高崗・饒漱石粛清の政治力学」と第九章「社会主義戦略としての毛沢東主義の起源」という二つの論文が収められている。このうち第八章は、中華人民共和国成立後、中国共産党指導部内ではじめて発生した権力闘争である高崗・饒漱石事件の意義とその政治的影響を検討したものであるが、徳田氏はここで、この事件発生の原因を、一九五三年にはじまる社会主義への転換という状況のなかで生れた㈠権力の集中化と地方勢力との再編過程における摩擦㈡資源の配分を中心とした地域的利害の摩擦と経済戦略の対立㈢指導部内の権力闘争、の三つに求めるとともに、高崗・饒漱石に対する粛清は、当時の党幹部一般が過去の革命期から継承してきた意識と行動様式を批判し権力構造の集権化を求めるための一種のスケープゴートともみられる、と主張している。しかもこの粛清に象徴される中国の政治体制の制度化、巨大化、正規化への傾向は、毛沢東の個人的な独裁制を強化するというよりはむしろ、それをそのなかに埋没させる反面、一九五〇年代半ばからの粛清運動の下降的拡大への契機をも与えることになつたとして、この事件のなかに中国におけるその後の政治発展を貫く二つの相対立する傾向、すなわち制度化と階級闘争の原初的形態をみいだしている。

いま一つの論文、すなわち第九章「社会主義戦略としての毛沢東主義の起原」は、一九五五年から一九五六年にかけての「社会主義の高潮」の時期に、社会主義建設戦略としての「毛沢東主義」が形成されていく過程を究明したものである。徳田氏は、一九五五年七月の有名な毛沢東の農業合作化演説にはじまる急激な農業集団化の過程を政治学的視角から分析し、毛の基本的見解は、ソ連モデルの中国化というよりはむしろ、別の戦略的系譜にたつ延安的社会理念への回帰であつたことを明らかにしている。またかれは、毛沢東にみられる階級闘争重視主義、基層幹部主導型の大衆動員方式、矛盾論にもとづく不均衡的社会発展の哲学、「一窮二白」の積極的評価などとならんで、集団指導の原則を軽視した毛の反制度的行動様式と人格的指導への欲求は、すでにこの時期において党の実務官僚型

指導者集団との緊張関係を潜在的に増幅させていたとして、その後の大躍進運動および文化大革命の発生につながる萌芽をこの時期における「毛沢東主義」の展開のなかにみいだしているのである。

以上が本論文の要旨であるが、中国共産党における毛沢東のリーダーシップの形成過程に関する徳田氏の研究は、内外の研究成果を十分に参照し、豊富な原資料を駆使して綿密にその立論を裏づけ、多くの点でこの問題に関する新な解釈をわれわれの前に提示したすぐれた研究業績であるといつてよい。この問題をとり扱つた第一部にくらべると、第二部は、徳田氏が今後中華人民共和国成立以後における中国の政治的発展過程の研究に取りくむに当つて、そのなかで中心的役割を担つてきた「毛沢東主義」の性格と構造とを究明するための手がかりを求めようとしたものであつて、どちらかといえばその理論的枠組の構成に力点をおいたものということができるであろう。その意味でわれわれは、将来さらにこの問題についての包括的な研究の発展を期待したいと考えている。

また、この論文第一部では、毛沢東のリーダーシップの形成過程を前述したようにまことに緻密に分析しているが、徳田氏のいう「毛沢東主義」そのものの性格と内容については、必ずしも十分に明らかではない。中華人民共和国成立以後における「毛沢東主義」の展開との関連をしるためには、この点をさらに体系的に究明することが必要であろう。

このような問題は存在するにしても、このことは本論文のもつすぐれた価値を基本的に損うものでないことはいうまでもない。したがつてわれわれは、本論文が中国現代史研究の発展に寄与する価値ある研究業績であることを認め、徳田教之氏に法学博士の学位を授与することを適当と考えるものである。

なお、本論文とともに二つの副論文「中国共産党の人的構成の特質」と「中国の政治・社会」が提出されている。いずれも徳田氏の中国研究の学識を示すものである。

昭和五十年三月

主査　慶應義塾大学教授　法学博士　石川忠雄
副査　慶應義塾大学教授　法学博士　中村菊男
副査　慶應義塾大学教授　法学博士　内山正熊

備考　本学位は、慶應義塾大学学位規程第四条によるものである。